

青山教会会報

「きよしこのよる」

イザヤ書五七章一五節
ルカによる福音書二章八〜二〇節

牧師 増田将平

羊飼いの話を聞いた人々は不思議に思ったと書かれています。何が不思議なのでしょうか。飼い葉桶に寝かされた赤ん坊が、私どものために生まれた神の独り子で救い主であることです。

ある人がルカによる福音書のクリスマス物語では「飼い葉桶」という言葉が三度用いられていることに注目し、それは「飼い葉桶」でなければならなかった特別な理由と意味があるからだと言っています。

「彼らがベツレヘムにいるうちに、マリヤは月が満ちて、初めての子を産み、布にくるんで飼い葉桶に寝かせた。宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである」。飼

葉桶とは、ろば、馬、牛などの家畜の餌を入れる道具です。獣医さんに聞いたところ、「飼い葉桶」とは言わずに「餌入れ」と言うそうです。「桶」は木製の容器を想像させますが、現代の馬の餌入れはバケツだそうです。この赤ん坊はバケツをベビーベッドにして寝かせられたということになります。イスラエルを旅行した際にガイドが飼い

葉桶を見せてくれました。木製ではなく岩の塊をくりぬいたものでした。岩のベッドは固くて冷たいでしょう。飼い葉桶が置かれていた家畜小屋がどのような場所か想像してみてください。どんな音が聞こえてくるでしょうか。どんな匂いがして何が見えるでしょうか。夜になれば真っ暗です。ベツレヘムは海拔七七四メートルですから夜になれば冷え込みます。

羊飼いたちは天使のお告げを聞いた時に野宿をしていました。夜勤です。彼らは人の羊の世話をする貧しい人々で、社会からはじき出された人々でした。クリスマス最初の知らせが届けられたのは皇帝アウグストゥスではなく、名前も記されない羊飼いたちでした。彼らが特別な何かを持つていたからではありません。貧しいが心は美しい人々だったわけでもありません。天使が来た時、彼らは神の栄光で心の

隅々が照らし出されたように感じ怖くなくなったのです。天使は告げます。「恐れることはない。今日、ダビデの町、ベツレヘムで、あなたがたのために救い主がお生まれになった」。続けて言います。「あなたがたは布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである」。「飼い葉桶」は羊飼いとって仕事道具であり、特別なものではありませんでした。飼い葉桶は家畜がいるところに置かれていますから、その場所はすぐにわかります。「馬小屋、家畜小屋」と言われると木造家屋を連想しますが、木材が貴重な地域で家畜のために木造の小屋を立てることは考えられません。おそらくそこは、現地にいたるところにある自然の洞窟の中であつたとも言われます。救い主に会うために、身分許可証は不要、ドレスコードも一切なし、聖書の勉強もないままで会うことができました。

なぜ飼い葉桶なのでしょう。宿屋はいっぱいでした。ある日皇帝が突然「全領土の住民に登録をせよ」という勅令を出したからです。国内では登録のための移動が始まりました。ベツレヘムは小さな町ですから、宿屋はすぐに満室です。臨月を迎えたお腹の大きな妊婦がいます。しかし誰

も、自分の場所を譲ろうとはしませんでした。この時のヨセフとマリアは、どこにももいる、普通の貧しい夫婦の姿をしていたことがわかります。背後からオーラが出ているとか、頭が光っているとかそういうことは全くなかった。神様はそうはなさらなかったのです。神の独り子であるお方がこの世界に来たのに、どこにも居場所がありませんでした。唯一の場所は家畜がいるところだけでした。この世界は誰も神様に場所を与えなかったのです。人は自分の場所をなかなか譲ろうとはしません。弟子たちは自分たちの中で誰が一番偉いか議論しました。自分の地位のことしか考えていません。人は「ここは私の場所」と主張し合いい、争いが止みません。ここにこの世界の闇があります。神様はすべてをご承知の上で御子をお遣わしになりました。狭くて汚れた「飼い葉桶」とは私どもの心のことに他なりません。そのただ中に主イエスは来てくださり宿ってくださいます。

「きよしこのよる」はオーストリアにある小さな村の教会で作られました。クリスマス前にパイプオルガンが故障してしまい、悩んだ神父はギターで歌えるクリスマス賛美歌を作詞しました。それがこの讚美歌です。この中に興味深い歌詞がありま

す。「御子の笑みに」です。飼い葉桶の中の乳飲み子の表情について聖書には書かれていませんが、この神父は心のうちに見たのでしよう。「飼い葉桶に寝かされ、安らかに笑みを浮かべて眠っている乳飲み子を見よ。この方こそ、あなたの救い主」

イザヤ書では「心の砕かれた人」に神様が近くおられると書かれています。心の砕かれた人とは、羊飼いたちのように神様のみ前では自分が何も誇れるものを持っていない人間であることを認める人であり、自らの心の中の飼い葉桶に主イエスを迎える人のことです。

マリアはクリスマスマスの出来事を大切な宝物を保管するように心の中に納めます。そして「思い巡らし」ました。文語訳の聖書では「思い回す」と訳されています。マリアはクリスマスマスの中心にいた人ですから、最初からすべてのことをよく理解していたのだらうと思うのですが、そうではありませんでした。マリアはクリスマスマスの出来事を何度も思い巡らしました。クリスマスが自分にとって何を意味しているかを考え続けたのです。

先日私どもの主にある姉妹、福田千代さんが天に召されました。千代さんはある日思いがけない事故でご主人を失います。お

嬢様によると、千代さんは何が起きたのか受け止めることができず、気が動転したまま青山教会で葬儀が行われたそうです。おそらくしばらくの間、ご主人の死と向き合いつつ、マリアのようにこの出来事を心に納めて思い巡らしていたのではないのでしょうか。やがて千代さんはクリスマスに生まれた救い主が、私どものために十字架について死んでくださったこと、このお方は復活し死に勝利してくださいましたことを、ご自分に起きたこととして改めて知りました。主イエスが今自分と共にいてくださること、さらには召されたご主人と共におられることを信じたのです。千代さんはご主人が亡くなられて数カ月後のクリスマスのは礼拝で洗礼を受けられました。「私には教会があつて本当に幸せです」と私に話されたことを思い起こします。

私どももマリアのように、千代さんのようにクリスマスマスの出来事を心に納めて思い巡らすことができます。主イエスは、私どもの心の飼い葉桶の中に来てくださいます。私どももまた、羊飼いたちのように千代さんのように神様を賛美しながら歩み続けることができるようになるのです。

(一二月二四日キヤンドルサービス説教要旨)